

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年5月24日現在

機関番号：33917

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011～2012

課題番号：23720035

研究課題名（和文） 「日本道観」研究—現代日本における道教の受容について—

研究課題名（英文） “Nihon Dokan” : The Acceptance of Daoism in Present Japan

研究代表者

長澤 志穂 (NAGASAWA SHIHO)

南山大学・南山宗教文化研究所・研究員

研究者番号：90535329

研究成果の概要（和文）：現代日本における道教受容の一例として日本道観を取り上げ、その思想や実践を、現代台湾道教や前近代中国道教と比較した。その結果、日本道観を通じて道教にアクセスする現代日本人が求めるものは主として実践を通じた自己修養であり、現代台湾道教や前近代の道教にみられる神々への信仰や先祖祭祀儀礼には関心が薄いことが分かった。また、道教の伝統にみられる人為的作為をとまなう擬似科学的自己鍛錬よりも、道家哲学の「無為自然」の世界観に沿ってありのままの自己を開放することに親しみを感じていることも明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This research dealt with Nihon Dokan as an example of acceptance of Daoism in present Japan, comparing with Daoism in present Taiwan and pre-modern China. Contemporary Japanese who access Daoism through Nihon Dokan mainly want to cultivate themselves with Daoist practice. It is different from contemporary Taiwanese and pre-modern Chinese who believe in Daoist Deities and require ancestor worship by priests. Besides that, these Japanese sympathize with the thought of “Wuweiziran (doing nothing and taking things as they come)” in Daoist philosophy of Laozi and Zhuangzi. Contemporary Japanese prefer relieving natural self to pseudoscientific and artificial self-cultivation of traditional Daoism.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：道教、中国宗教、日本宗教

1. 研究開始当初の背景

(1) 近代西洋文明のグローバル化と問題が顕在化する今日の社会において、日本を含む東アジアの宗教に関する研究は、我々の伝統文化や伝統的価値観を見直す方途の一つとして大きな意義をもっている。歴史的に長期にわたり日本文化に影響を及ぼしてきた中国の思想・宗教もまた、重要な研究対象の一つである。とくに道教は、中国の風土から自然発生的に生まれた中国固有の民族宗教であ

り、道教の思想内容を理解することは、東アジア文化の理解に大きな一助となる。

(2) 道教研究は現在、大きく二つの流れに分けることができる。一つは歴史的・文献学的研究であり、もう一つは道教の現状についてのフィールドワークを用いた研究である。歴史的・文献学的研究の分野においては、道教教団史研究、道教の哲学および世界観に関する研究、道教経典の書誌学的研究、道教の修

養法に関する研究などが一定の成果を収めてきた。また、フィールドワークの分野においては、中国・台湾・香港等をフィールドとする儀礼研究が盛んに行われている。近年では、古い道教儀礼文献と現在行われている道教儀礼とを対照しつつ研究を進め、歴史的研究とフィールドワークを結合しようとする取り組みも進展しつつある。

(3) 道教と日本文化の関わりについては、道教が日本に教派・教団として招来されなかったため、従来、日本文化の様々な面に潜在し、「道教」と認識されることなしに受容されている道教的要素を対象とした研究が主流であった。

(4) 現代日本では道教関連著作が書店にならび、また、道教信奉を明言して活動する個人・団体も存在するなど、道教という存在を認識している日本人は少なくない。しかし、現代日本人の道教認識についての学術研究は、伝統的漢文学・中国学の分野においても、主に現代社会を対象とする学問分野においても、ほとんど存在しない。

(5) これまで、中国道教思想史や道教教団史についての歴史的研究、および現代中華圏におけるフィールドワークを通じた道教研究はかなり蓄積されてきた。現在、それらの成果を十分にふまえつつ、現代日本社会における道教への関心についてフィールド調査を行い、成果の結合を試みるに適切な時期にきていると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、現代日本における道教受容の様相について、その一端を明らかにすることを目的とする。具体的な目的は以下のとおりである。

(1) 現代日本において道教的思想・実践を基盤として活動している団体「日本道観」を調査対象とし、基本的データを収集し、その道教思想の解釈と適用について明らかにする。

(2) 現代中華圏、とくに台湾において道教儀礼に関わる人々の意識と、現代日本における道教受容の差異について明らかにする。また、台湾道教協会の日本道観との交流について明らかにする。

(3) 近代以前の中国における道教の自己修養について研究し、現代日本における道教実践と比較し、その差異を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 日本道観を訪問したり、関連する書籍を収

集したりして、資料収集および聞き取り調査を行い、日本道観の沿革について整理する。また、日本道観の現状についての基礎的データおよび現在行われている道教的修養や儀礼の概要についてまとめる。

(2) 台湾の道教会と連絡をとり、日本と台湾の道教団体の交流状況について調べる。また、台湾の道教施設を訪問して、一般民衆が参加する道教儀礼や修養についてのフィールド調査を実施し、現代台湾社会における道教受容の様相について調べる。

(3) 内丹に関する歴史的・文献学的調査を行い、前近代中国における在家者の道教に対する関心の持ち方の一端を明らかにする。内丹は、自己の体内における金丹の生成をイメージする瞑想法であり、前近代の中国社会において道教徒のみならず知識人を中心に広く受容された。本研究においては、内丹修養を求めた在家者の一事例として、17世紀末の浙江・江蘇地方において知識人サークルによって編まれた『太乙金華宗旨』という内丹文献を取り上げる。この文献は複数の在家者がいかにして道教的修養に興味を抱いたかについての記録を含む貴重な例だからである。この文献を読解・分析し、前近代中国の在家者の道教に対する需要とはいかなるものであったのかを考察する。

(4) 以上の方法によって得られた現代台湾道教、前近代中国道教、日本道観にみられる道教受容に関するデータを比較検討し、現代日本における道教受容の特徴について、その一端を明らかにする。

(5) 台湾の研究機関を訪れ台湾道教についての意見交換・資料収集を行う。海外の研究者を招くなどして意見交換を行う。調査結果を整理・分析し、公開する。

4. 研究成果

(1) 日本道観は昭和55年に早島正雄（天来）氏（1910-1999）によって設立され、昭和60年から株式会社「導引医学研究所」を母体として活動を続けている。現在は早島妙瑞氏を会長（道長）とし、早島妙聴氏を社長（副道長）とする。福島県いわき市を本部とし、日本全国に10の学院をもつほか、北京やインターネットにも支部をもつ。

その教えは、早島正雄氏が生家である大高坂家より継承した導引術を中心とする。導引術は中国に古代から存在する一種の体操法であり、不老不死や健康を重んずる道教において重視されたものである。早島氏の導引術は台湾道教教団にも評価され、早島氏に対し

道家龍門派第十三代の継承が認められ、また台北の嗣漢張天師府から大師の位を与えられた。

正雄氏が築いた台湾道教界との交流は、現在の日本道観にも受け継がれており、現道長である早島妙瑞氏は道家龍門派第十四代を継承するとともに、嗣漢張天師府首席顧問や台南市道教会顧問を歴任している。

日本道観は導引術など早島氏が説いた修養法を、タオイズムの気のトレーニングとして現代人に分かりやすく指導している。内容は1.洗心術、2.導引術、3.動功術の3つに分けられる。洗心術は心の不安や悩みを取り除くトレーニングであり、導引術は呼吸法と体の動きを組み合わせた健康法であり、動功術は武術の習得によって柔軟な心と体をめざす。いずれも中国伝統の「気」に着目し、気の流れを潤滑にすることを志向する。

思想面では早島氏に『老子』の注解があるように、『老子』『莊子』の道家思想を基盤とし、「無為自然」を理想的な人間のあり方とする。

日本道観は刊行物も多数世に送り出している。その大部分を占めるのが早島正雄氏の生前の著作である。具体的な健康法や、日常生活でぶつかる困難を克服するための具体的アドバイスが書かれたものが多い。また、近年出版された早島妙瑞氏の著作群には、無為自然の思想をふまえて日常のものの考え方を直すためのヒントが書かれたものが多い。

全体として、自己修養を中心にしつつも出家主義ではなく、世俗社会において受講者個人が修養の成果を発揮していきいきと生きること重点が置かれているといえる。

(2)台湾の道教団体は、各主要都市に道教会があり、中華民国道教会がその連携を担っている。日本の個人・団体との交流は、道教研究者を除くと、道教関連では日本道観とのつながりあり、また日本の一般社会に対しては、東日本大震災への復興義援金提供や慰問などを行った。

台湾の道教団体のなかでも、日本道観はとくに台南市道教会と強いつながりを持ち、台南へ訪問団を派遣し儀礼に参加したり、台南市道教会の道長らを日本に招いて道教儀礼を行ったりしている。

フィールドワークを通じ、台湾道教の中元節、日常の廟空間における礼拝、地方都市の講による祭礼を観察することができた。そのさいの参加者の発言から、道教に求められているものは先祖祭祀儀礼の提供や、金銭・生業・人間関係などへのご利益が中心であるといえる。これらの活動は、媽祖や閩帝など道教の神々への祈りや願いによって構成される。このことは、瞑想など自己修養の指導

者・研究者が教団内に少ないという道教会関係者の発言からも裏付けられる。

このような台湾道教のあり方と比較すると、日本道観にみられる道教への期待は、主に自己の心身の鍛練や癒し、すなわち自己修養の教えに向かっている。日本道観自体は道教儀礼にも参加しており、神々への祈りを行っているが、一般人むけコースは導引術等の指導を中心としている。さらに、先祖祭祀を期待しての道教との関わりはほとんどみられない。ここには、道教の神々への信仰という面や、家・地域社会などの共同体に埋め込まれた民俗宗教としての面はかなり薄く、それよりも自己修養の一方法として道教に興味をもつ現代日本人の傾向があらわれているといえる。

(3)自己修養としての内丹(道教的瞑想の一種)を重んじた17世紀末浙江・江蘇地方のある知識人サークルは、降神による自動筆記(所謂こっくりさんのようなもの)を用いて道教の神仙と交信し、『太乙金華宗旨』という内丹文献を編んだ。彼らは必ずしも道教徒ではなく、個々人の知識欲のおもむくままに儒教・仏教・道教を学んでいる。また、彼らの主な関心は、高い心の境地への到達や、健康ということにある。こうした関心のもち方は、特定の信仰をもたずに好みの宗教を学習し、自己修養に役立てようとする現代日本人に通ずる面がある。

しかし、この道教サークルの内丹理論への関心は、道教の神仙に対する明確な信仰に支えられており、神仙から自動筆記を通じて直接授かった教えであることがこの理論が他の理論より優越していることの根拠とされている。また、その内丹技法は、擬似科学的で複雑な手順を内包し、精神と共に肉体の日常的ありようを人工的に改変する、人為的作為を強くともなうものである。そこには、誕生時の人間のあり方を理想とし、日常の自己のあり方を墮落・衰退したものとして否定し、生→老→死という自然の過程を逆行しようとする強い意図がはたらいている。

それとは対照的に、日本道観における自己修養は、『老子』『莊子』などの中国古代の道家哲学を理論の支柱とし、「無為自然」を基調としたありのままですなおな生き方を提唱する。むしろ自然な自己のあり方を肯定する傾向にあるのである。その修養法は、自己を改造しようというよりは、本来の自己を開放しようとする傾向にあるといえる。また、中華圏において広く信仰されている道教の神々については、ほとんど語らない。そもそも、当団体の教えが宗教や信仰であるという表現は積極的には行っていない。

前近代中国にみられる道教的自己修養への希求と、日本道観にみられるそれとの比較

から、日本道観で学ぶ現代日本人は道教に宗教的信仰や、現代人の科学知識と矛盾をきたすような複雑な理論・技法をあまり求めていないといえる。あえていえば道家思想の「道（タオ）」を秩序とする世界観を前提として受け入れているが、理論よりも感性において体感できる自己の肯定と充実を求めているのである。

(4)以上のように得られた知見は、現代日本におけるフィールドワークのみから得られるものでも、歴史学的・文献学的研究のみから得られるものでもない。本研究代表者はこれまで長年中華圏の道教に関する歴史学的・文献学的研究とフィールドワークに従事してきた。その成果が背景にあつてはじめて現代日本人の道教に対する関心との比較研究が可能となったものである。これらを比較した研究や、日本道観に着目した研究はこれまでにほとんどなく、新たな知見を得ることができたと考える。

また、今後、より多くの歴史学的研究の成果、中国大陸における道教の現状、日本国内の道教に関する他の事象などをも考察の対象に含め、一層広く厚みのある比較研究が想定でき、さらに展開の余地のある研究テーマであると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

- (1) 長澤志穂、明清道教内丹文献と『楞嚴経』—『仙仏合宗語録』と『太乙金華宗旨』の場合—、南山神学別冊、査読無、28号、2013、pp. 1-16.

[学会発表] (計 1 件)

- (1) 長澤志穂、 “Rereading Taiyijinhuaazongzhi: A Change of Daoist Meditation in Qing China” , International conference “Scholarly Perspectives on China: The View from Japan” , 京都大学人文科学研究所、2011年11月13日

[図書] (計 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長澤 志穂 (NAGASAWA SHIHO)
南山大学・南山宗教文化研究所・研究員
研究者番号：90535329

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

長澤 壮平 (NAGASAWA SOHEI)
中京大学・非常勤講師

周 韵 (ZHOU YUN)

京都インマヌエル宣教教会・アシスタント